「心の幻ではなく神の言葉を」　エレミヤ２３：９－２２　2024,4,21　　札幌発寒教会

古賀　清敬

エレミヤは迫りくるバビロンの攻撃に、この場合は降伏することが悔い改めの証であると語りました。それは、これまでのユダの罪に対する神の裁きだから、というわけです。そして、その罪の中心的な責任者としてダビデ王家の権力濫用を批判し、さらに王朝自体の断絶宣言にまで踏み切りました。それはユダの一般民衆も、ダビデ王朝があるかぎりユダは大丈夫だと頑迷に信じて、どんなに神の戒めを破っても平気で、神の言葉に聞こうとしなかったからです。

王批判に続いて、エレミヤは預言者たちを批判し、責任を追及しました。本日の箇所がそれにあたります。

まずエレミヤは９節で、これから語る預言者への批判は、神の言葉に照らされてであって、自分の持ち前の基準や主張によってではないこと、またその光に照らされて、いかに預言者たちが腐敗堕落しているかが歴然としており、自分も耐えられないほどに動揺している、との心中を率直に吐露しています。

その腐敗堕落は「姦淫」という言葉で表現されています。それは１０節以下で挙げられているように、契約を破るという不誠実な行為すべてを表す言葉として用いられています。神ヤハウェとの契約を破り、バアルなど他の神々を拝む偶像崇拝、夫婦など人と人との契約を破る姦淫罪、そして社会的不正や抑圧も含めて用いられています。そこに共通しているのは、不誠実であり、正しい関係の破壊といえるかと思います。

さらに姦淫罪は、神との関係、人との関係を破壊する罪ばかりでなく、１０節ａ「国土は呪われて喪に服し」、１５節ｃ「汚れが国中に広がった」とあるように、聖書では「地を汚すもの」とも指摘されています。それは人と自然との関係も破壊し、戦争や過剰な繁栄追求によって自然破壊をもたらす罪としても認識されているわけで、鋭い指摘だと思います。

このような指摘に照らされて、自分を省みても何と不誠実なことが多かったかと忸怩たる思いにかられますし、多くの人々が覆われてしまっている罪ではないかと思います。

さて、預言者と呼ばれる人々は、古代オリエントに広く存在しており、王の相談役的な働きをしていたようです。ほとんどが王の意向に賛成して、それを権威づけるように神託と称して、気に入られることを語っていました。

それに照らせば、聖書の預言書や歴史書に登場する預言者は例外的で、王に対しても批判的な言葉を堂々と語る点が特徴的な違いと言えます。しかし、やはりユダ・イスラエルにも職業的な預言者集団があって、王や指導層に追従する人々がほとんどだった様子が、この箇所からも伺えます。（他に列王記上２２章も参照）

つづいて１３－１５節では、まずサマリア、すなわちすでに滅んでしまった北イスラエルの預言者について、バアル崇拝へと人々をそそのかした姦淫罪として糾弾がなされています。その返す刃で、すぐさまエルサレム、つまり南ユダ王国の預言者に対して、より詳しく姦淫、偽り、社会的不正への加担であると糾弾と裁きが宣告されています。

ここでソドムとゴモラが、神に逆らう典型的な町として挙げられています（１４節)。それがどのような罪であるかについて、長らく「男色」（同性愛）と考えられてきまして、今でも同性愛が罪の代名詞であるかのように信じ込んでいる人々は多くいます。しかし、その箇所（創世記１９章）を単純素朴に読めば、ソドムの人々（町中の男たちが、若者も年寄りもこぞって）が「神の使い」を迎え入れたロトの家に押しかけて、彼らにとって胡散臭いよそ者である「御使い」を出せ、「なぶりものにしてやる」と迫ったのでした。これは繁栄に浸っていたソドムの町全体が、よそ者を暴力的にでも排除して自分たちの安全を保障しようと過剰反応している、町全体が末期的な腐敗状況にあることを表しているのであって、同性愛などではありません。押しかけてきた男たちが皆同性愛者だったというのは、相当無理なこじつけにすぎません。そうではなく、町全体が神に逆らう敵対心で満たされていたという最悪の状態なので、町全体が滅ぼされたということです。ですから、ソドムとゴモラの話は、自分たちだけの繁栄と安全を守るためなら、よそ者、異質な人々を排除し、滅ぼしてもかまわないという信念こそが、かえって神に逆らう大罪であり、そんな町こそ滅びるのだという実例として語られているわけです。そこを同性愛への偏見に毒されて矮小化してはなりません。聖書の間違った読み方が、どれほど同性愛の人々を傷つけ、追い込んできたか、わたしたちキリスト教会の歴史的責任は大きい、と悔い改めなければならないと思います。

さて、つぎの１６－１７節では、ソドムとゴモラに匹敵するほどまでに民をそそのかしたにせ預言者の特徴が明らかに示されています。それは、神の言葉ではなく、自分の心の幻を語り、空しい望みを抱かせると言われています。

そうして、こともあろうに「神を侮る者たち」に「平和」を保障する。すなわち、神の御心である正義と公正とを踏みにじって利益を獲得し（たとえ合法的にであっても不誠実)、社会の格差と対立を作り出している人々に「平和」を保障しているのです。そうした行為を悔い改めない、「かたくなな心のままに歩む人々」に「災いはない：大丈夫」と保障しているのです。

預言者たち自身が直接、搾取や抑圧を行っていないとしても、そのような悪を行う王や高官、貴族や商人たちに対して批判し、止めさせようとするのではなく、むしろ「神の祝福とご加護」を祈り、弁護するという、宗教の腐敗堕落極まりない麻痺状態に陥っていました。

では、どうしてにせ預言者たちは転落してしまったのか、その決定的要因は「主の会議」に立ったことがないから、と１８節以下で指摘されています。「誰が主の会議に立ち、また、その言葉を見聞きしたか・・・」と問いかけています。

そこでは、「主の嵐が激しく吹き、・・・神に逆らう者らの頭上に渦を巻く。主の怒りは、思い定められた事を成し遂げるまでは止まない」（１９，２０a)。とあるように、神の審判の意志が確固たることが明らかにされているのですが、それをにせ預言者たちは体験していないから、好き勝手なことを平気で言っていられるのだ、と指摘されています。

そういうことで、にせ預言者は、一方で抑圧と搾取の現場に行って確認し、その被害者の訴えも聞いておらず、他方で、それに対する神の怒りが暴風のように巻き起こっている「主の会議」にも立ち会っていないという、安穏とした状態でした。それゆえに、自分の心の幻をあたかも神の言葉であるかのように語れたのだと言えると思います。

こういうことは、わたしたちも陥りやすい間違いで、自分や人々の願望や主張が先にあり、聖書の言葉をその正当化のために利用していないかどうか、注意する必要があります。

そのためにはどうしたらよいでしょうか。わたしたちは旧約の預言者のように「主の会議」に立つという特別な経験は滅多にはないでしょう。しかし、そのような人々の証言である聖書の言葉と、その真理を明らかに示してくださる聖霊の導きが与えられています。そして絶えず祈りなさいと勧められているように、神と人との唯一の仲保者である主イエスの御名による祈りに生きる信仰の道が与えられています。

それによって絶えず主なる神との交わりに生き、主の御心を問い求め、それに反するものには、自分の願望であれこの世の惑わしであれ抵抗する生活へと招かれているのです。たとえ失敗しても、その負い目も主が共に担ってくださるゆえに生きることができます。

主イエスは、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マルコ８：３４）と招かれました。「自分を捨て」という中に、「自分の心の幻」が含まれているでしょうし、それに支配され御心に反した失敗も含めて「自分の十字架を背負って」と語られているのだと思います。それが、エレミヤ２３章２２節で「もし、彼らがわたしの会議に立ったのなら、わが民にわたしの言葉を聞かせ、彼らの悪い道、悪の行いから帰らせることができたであろう」と、神ご自身が示しておられる解決の道、救いの道に通じているのではないでしょうか。（了）